

Title	創作への意思 : Jacob's Room 試論
Author(s)	宇野, 玲子
Citation	Osaka Literary Review. 28 p.154-p.168
Issue Date	1989-12-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25554">https://doi.org/10.18910/25554</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 創作への意思

## — *Jacob's Room* 試論

宇野玲子

### I

1920年1月26日付の日記に Virginia Woolf は、二年後に *Jacob's Room* (1922) として出版されることになる「新しい小説」(“a new novel”)の構想を胸に、新しい作品への意欲と共に次のような自戒の言葉を書き記している。

I suppose the danger is the damned egotistical self ; which ruins Joyce and Richardson to my mind : is one pliant and rich enough to provide a wall for the book from oneself without its becoming, as in Joyce and Richardson, narrowing and restricting?<sup>1)</sup>

ここには、作品への自我の介入は作品を偏狭な制約されたものにする、作品を自我から隔てるためには精神が柔軟で豊かでなければならない、という創作についての Woolf の考えが現われている。この考えは、すでに、モダニズムのマニフェストとも言うべき評論“Modern Novels” (1919) の中で漠然と呈示され、さらに、1928年の講演“Women and Fiction”に基づく評論 *A Room of One's Own* (1929) においても敷衍されている。このことから、それが Woolf にとって非常に大切な問題であったことがわかる。

Woolf が日記の中で「新しい小説についての新しい形式」(“a new form for a new novel”)について思い至ったことを興奮にうち震える口調で語りながら「テーマについては白紙の状態である」(“the theme is a blank to me”)と告白しているように、*Jacob's Room* は形式への興味と創作行為自体への関心から生まれた作品であった。しかも“Modern Novels”発

表以来、独自の小説形態を探求し続けていた Woolf にとって、*Jacob's Room* が未来への可能性を賭ける最初の実験小説であったことを思えば、日記の中で吐露した創作についての懸念と思惟が Woolf の心の多くを占めていたであろうことは想像に難くない。

本稿では、Woolf の創作についての思考が、*Jacob's Room* の構造と内容をいかに支配しているか、先に述べた二つの評論、特に *A Room of One's Own* の主張を参照しながら明らかにしたいと思う。

“Modern Novels”の中で Woolf は James Joyce の *Ulysses* を現代小説の代表として取り上げ、それが独創性を持つてはいるものの、なお、傑作と呼ばれる過去の作品に及ばないとして、その理由を次のように述べている。

It fails, one might say simply, because of the comparative poverty of the writer's mind. But it is possible to press a little further and wonder whether we may not refer our sense of being in a bright and yet somehow strictly confined apartment rather than at large beneath the sky to some limitation imposed by the method as well as by the mind. Is it due to the method that feel neither jovial nor magnanimous, but centred in a self . . . ?<sup>2)</sup>

この評論が加筆修正されて “Modern Fiction” と題して、*The Common Reader* (1925) に収録された時、引用中の第2文はこのように書き替えられている。

But it is possible to press a little further and wonder whether we may not refer our sense of being in a bright yet narrow room, confined and shut in, rather than enlarged and set free, to some limitation imposed by the method as well as by the mind.<sup>3)</sup>

作家の精神と手法のために、作品がある種の閉塞感を読者に与えるという主張は変わらないが、“Modern Novels”で、“apartment”と“beneath

the sky”によって表わされた「閉塞感」と「解放感」が、“Modern Fiction”においては“room”一語で表わされている。「部屋」が閉じこめもし、解放もするという発想である。“room”という語が *A Room of One's Own* と *Jacob's Room* のタイトルの中に共通に用いられていることを考える時、Woolf がここでその言葉を用いたことは注目に値する。

*A Room of One's Own* においては、Woolf の創作についての考えは、社会的・歴史的コンテクストの中で呈示される。「作品を自我から隔てるに十分な柔軟性と豊かさを私は持ち合わせているだろうか」という日記の言葉は、ここではフェミニズム的コンテクストをもって説明されている。肉体に二つの性があるように、もし精神にも二つの性があるとするならば、精神の男性的部分と女性的部分が統合され、均等に用いられることこそ作家にとって理想的なのだ、と Woolf は論じ、そのような状態にある精神を「両性具有的精神」(“the androgynous mind”)と呼ぶ。Phyllis Rose も指摘するように、<sup>4)</sup>「両性具有的」という Woolf の言葉は、精神のひとつの状態を生体的・性的イメージによって表わしたメタファーであり、したがって「両性具有的精神」とは、均衡のある精神、自意識を超越した精神を意味している。

現代の文化遺産の一部は、Woolf によって「両性具有的精神」と呼ばれる詩人や作家達により、受け継がれてきたものである。Woolf は、過去に女性がこの文化遺産の継承と伝達の歴史に列することがいかに困難であったかを論じ、そのことを家父長制社会の構造に帰している。しかし、反面、家父長制度の下で、男性と女性は自意識に妨げられずに調和していた、と Woolf は考えている。

女権拡張運動は、女性の地位の向上と共に、過剰な性意識を人々の心にもたらした。その結果、「両性具有的精神」を持つことは過去においてよりもはるかに困難になった。このように論じる Woolf は、Shakespeare, Keats, Sterne など多くの「両性具有的精神」を輩出した過去の時代を、「あの幸せな時代」(“that happy age”)<sup>5)</sup>と呼んでいる。

John Burt も指摘しているように、<sup>6)</sup> *A Room of One's Own* の主張は、過去の時代を、一方では、女性が男性の支配下に置かれていた不幸な時代と見做し、他方では、多くの「両性具有的精神」を生み出した幸せな時代と考える点で、全く矛盾している。しかし、その矛盾は、女性であり作家でもあった Woolf にとって、解消不可能なものであったに違いない。それ故、Woolf は矛盾をそのまま呈示して、未来に期待をかける。「もし私たちがあと一世紀程生き……一人一人が 500ポンドの年収と自分自身の部屋を持つようになったら」(“if we live another century or so ... and have five hundred a year each of us and rooms of our own”)<sup>7)</sup>、その時こそ真の芸術家たる女流作家が生まれるであろう、と。「500ポンドの年収」と「自分自身の部屋」とは“Interlectual freedom depends upon material things.”<sup>8)</sup> という Woolf の言葉が語るとおり、第一義的には物質的なお金と個室を指している。しかしながら、これまでの主張を振り返る時、Woolf にとって、「自分自身の部屋」が「両性具有的精神」を同時に意味していることは明らかである。

## II

*Jacob's Room* は、発表当時、手法と形式の斬新さによって注目を浴びたものの、*Mrs Dalloway* (1925)、*To the Lighthouse* (1927) などの陰にあって、未熟な作品として軽んじられ、論じられることが少なかった。しかし、近年この作品はフェミニズムの立場から再検討されている。

*Jacob's Room* のフェミニスト的解釈は、Jacob Flanders を父権社会に参与する男性の代表と見、彼の住まう男性社会が女性である narrator によって outsider の立場から描かれているとする点において共通している。<sup>9)</sup> こうした観点からの読みが、テキストに隠蔽されている様々な興味深い要素を明らかにすることは確かである。しかし、*Jacob's Room* の語りを支配しているのが、哀感に満ちたノスタルジアと Jacob に対する穏やかな好意であることを考えると、Jacob を父権社会の権化と見做すことに疑問を抱

かざるを得ない。

たしかに、Jacob を取り巻く世界は、outsider の立場から語られており、また narrator のフェミニストの意識を反映して、父権社会の様々な特質を露呈している。しかも、その語りには、辛辣な風刺とアイロニーが伴っている。しかし、その矛先は、決して Jacob に向けられることはない。Jacob を語る narrator の目は、時に保護的な感情を、時に畏敬の念を伴いながら、常に好意的である。また、Jacob を取り巻いているのはフェミニストの意識を知らない女性達であり、Jacob と彼女達との関係は概して調和的である。一見矛盾とも見えるこのような *Jacob's Room* の語りの構造は、*A Room of One's Own* の主張とのパラレリズムによって説明することが出来る。

家父長制度の下に調和している Jacob と女性達の世界は、*A Room of One's Own* の中で Woolf が過去に見出した、性意識過剰の風潮が生じる以前のイギリス社会である。すでに見たように、Woolf はそのような過去の時代を Shakespeare をはじめ多くの偉大な詩人や作家を生んだ「幸せな時代」と呼んだ。今、語りの中心に据えられる Jacob は、それらの詩人や作家達の系譜に列なるべき「両性具有的精神」を具現していると考えられよう。一方、Jacob より十歳年上で、女性であることをほのめかす narrator の視点は、創作への意思に貫かれた Woolf の視点にほぼ重っていると見てよい。その narrator にとって、調和の社会としての Jacob の世界は、フェミニズムの問題を温存しているにもかかわらず、希求せずにはおれない失われたユートピアである。それ故に、Jacob の世界は、outsider の立場から、父権社会に対する幾分かの風刺と共に、Jacob への温情とノスタルジアを伴って語られるのである。*A Room of One's Own* の中で、第一次世界大戦が過去の「幸せな時代」の終焉を印すものとして暗示されている<sup>10)</sup> ことを思うとき、大戦後に書かれたこの小説が戦前のイギリス社会を描いていることは示唆的である。*Jacob's Room* の世界は、まさに、*A Room of One's Own* の中で、“Oxbridge” の昼食会に出席した

「私」が、ノスタルジアに駆られて思いを馳せる戦前の昼食会に比することができであろう。

Before the war at a luncheon party like this people would have said precisely the same things but they would have sounded different, because in those days they were accompanied by a sort of humming noise, not articulate, but musical, exciting, which changed the value of the words themselves.<sup>11)</sup>

大英博物館の場面の語りは、上に述べたような *Jacob's Room* の作品構造を凝縮した形で呈示している。無心に Marlowe の一節を書き写す Jacob の周りには、様々な男女がいる。父権社会のドグマチズムの権化と見える無神論者 Fraser, 男性優位社会への反骨精神に燃えるフェミニスト Julia Hedge, 父権社会への従属に甘んじつつ、フェミニスト的意識に半ば目覚めた、振るわない女性哲学者 Miss Marchmont。Jacob と何の関わりも持たないこれらの男女の内面とその精神的背景が個々に語られる中で、Jacob については簡単な外的描写が二度与えられるだけである。このことは、無心に Marlowe に没頭する Jacob の姿を浮き立たせ、周囲との対照によって彼の無意識を強調する。しかもこの時 Jacob と Miss Marchmont との間に次のようなハプニングが起こる。Miss Marchmont の本の山が隣の Jacob の上に崩れかかったのである。これは「本を出版するには資金が必要だ」(“she needs funds to publish her book”) という考えに気を取られた Miss Marchmont が、机に積み上げていた本の山に肘を突っこんだためであったが、一方、「Jacob はびくとも動かなかった」。(“Jacob remained quite unmoved.”)<sup>12)</sup> *A Room of One's Own* の主張を念頭に置いて考えるとき、自意識のために均衡を失った Miss Marchmont の精神が、「両性具有的精神」の具現たる Jacob の上に崩れかかる、という隠し絵がここに埋めこまれていることがわかる。<sup>13)</sup>

テキストの中に隠されていた寓意的な意味は、まもなく narrator 自身によって明らかにされる。Marlowe を読む Jacob を視野に収めながら、

narrator は次のように語る。

Youth, youth — something savage — something pedantic. For example, there is Mr Masefield, there is Mr Bennett. Stuff them into the flame of Marlowe and burn them to cinders. Let not a shred remain. Don't palter with the second rate. Detest your own age. Build a better one. . . . Useless to trust to the Victorians, who disembowel, or to the living, who are mere publicists. The flesh and blood of the future depends entirely upon six young men. And Jacob was one of them, no doubt he looked a little regal and pompous as he turned his page, and Julia Hedge disliked him naturally enough. (p. 103)

未来を担う若者達とは、Cambridgeで共に学んだ若者達、Jacobとその学友、を指しているに違いない。<sup>14)</sup> このことはそれらの若者達の知的な交流が、幾ばくかの羨望と共に、賞賛と崇敬の念を込めて語られていることに示されている。「月光の曲」が響く、夜のCambridgeの学寮の、一室に集う若者達の知的で穏やかな雰囲気、外の闇の中から narrator の目を通して伝えられる時、それらの若者達を包む空間が、ある種の非現実的な輝きを帯びて暗闇の中に浮び上がるのを、われわれは見る。この輝く空間は、まさに Jacob の、そして他の全ての若者達の精神である。narrator は、Jacob を未来を担う若者達の一人に数えるが、彼が語りの中に占める位置を考えるならば、ある意味で、Jacob はそれらの若者達が象徴する一つの理想的精神、すなわち「両性具有的精神」の具現であると言えるだろう。

上の引用に見られる Masefield や Bennett に対する攻撃は、“Modern Novels” や *A Room of One's Own* における、当時の流行作家達への Woolf の厳しい批判を思い起こさせる。Woolf は彼らの作品を、過去の傑作に比肩するものとはいい難く、消えゆく運命にあると見る。このことを考えるとき、われわれは、大英博物館に眠る「巨大な精神」(“an enormous mind”) を「炎」(“flame”) と「ねずみ」(“rat”) と「泥棒」(“burglar”) から守るために館内を巡回する夜警たちが、それらの作家達の戯画であることに気づくのである。「Plato や Shakespeare の背をランタンで照らし」



(“flashing their lanterns over the backs of Plato and Shakespeare” — p. 105.) 文化遺産の保護に努める夜警に対して、同じ夜、自分の部屋で Plato の *Phaedrus* を読み耽る Jacob は、古典文学から連綿と続く文化継承の真の後継者として位置づけられている。

But he read on. For after all Plato continues imperturbably. And Hamlet utters his soliloquy. . . . Plato and Shakespeare continue ; and Jacob, who was reading the *Phaedrus*, heard people vociferating round the lamp-post, and the woman battering at the door and crying, ‘Let me in!’ as if a coal had dropped from the fire, or a fly, falling from the ceiling, had lain on its back, too weak to turn over.

.....

The dialogue draws to its close. Plato’s argument is done. Plato’s argument is stowed away in Jacob’s mind, and for five minutes Jacob’s mind continues alone, onwards, into darkness. (p. 106)

われわれは、ここに、あるひとつの精神が Plato から Shakespeare, そして、Jacob へと、一筋の流れを成して続いている様を見るであろう。

「入れて」と叫ぶ酔いどれ女は、上の引用の直前にも、夜の大英博物館の描写と共に言及されていた。大英博物館内の静謐と Jacob の精神の沈静が、降りしきる雨、夜の闇と相まって厳肅さを醸し出す。その傍らで「入れて」と叫ぶ女は、ある意味で、文化継承の歴史から閉め出されてきた女性達の悲惨な姿を表わしている。しかし、また同時に、それは、Jacob の住まう調和の世界を希求しながら outsider としてしか語ることのできない narrator が、自らの姿を戯画化したものと見ることも出来るだろう。その女を「火の外に落ちた石炭」「天井から落ちたハエ」に喩えることで、narrator は、いわゆる楽園から墮ちた自分の立場を再認識しているに違いない。

## III

*Jacob's Room*には、様々な詩人や作家、文学作品が、Jacob との関わりにおいて言及されている。Jacob は、イギリス文学の古典とされる作品を好み、ギリシア・ローマの古典文学に傾倒する文学青年である。このような文脈の中で、Jacob の London の下宿が18世紀の造りであることが繰り返し語られ、その重厚で立派な造作が、“The eighteenth century has its distinction.” (p. 67) という文章で表わされる時、われわれは、18世紀が英文学の黄金時代であったことを思わずにはいられない。英文学史上、18世紀は、伝統と規律を重んじる古典主義と、横溢する自然な感情を貴ぶ浪漫主義との攻めぎ合いの中、多くの優れた文学作品を生みだした時代であった。実のところ、Jacob の精神は、ある意味で、この18世紀の時代精神を反映している。たとえば、Richard Bonamy が Jacob の中に見いだした「ロマンチックな気質」(“romantic vain” — p. 136) は、娼婦 Florinda の無頓着な女なつこきにギリシア時代の女を連想するところにも示されている。一方、彼は「男同士のつきあい、世を避けてひきこもった部屋、そして古典の文学作品に向かって、激しく逆戻り」もする。(“He had a violent reversion towards male society, cloistered rooms, and the works of the classics. — p. 79)

18世紀の特色とされた「立派さ」(“distinction”) が、同時に Jacob の他人に与える印象であることにも、18世紀と Jacob との類縁性は暗示される。とはいえ、相反する二つの思潮を孕んだ18世紀の時代精神、そしてそれに重なる Jacob の精神が、共に「立派さ」という一言によって表わし得るはずはない。narrator は、「立派さ」が Jacob にふさわしい言葉であることを認める一方、Jacob の捉え難さを強調し、その言葉が彼を言い表わすに足る「一語」ではないことをほのめかす。そして、その「一語」を探し求めるポーズを取りながら、その試みが徒勞であることを暗に示している。

... distinction was one of the words to use naturally, though, from looking at him [Jacob], one would have found it difficult to say which seat in the opera house was his, stalls, gallery, or dress circle. A writer? He lacked self-consciousness. A painter? There was something in the shape of his hands ... which indicated taste. Then his mouth — but surely, of all futile occupations this of cataloguing features is the worst. One word is sufficient. But if one cannot find it? (p. 68)

これより後、Jacob が Gray's Inn で仕事をしていることが、ごく暗示的に示される。恐らく彼は弁護士になるための修業をしているのであろう。だが「弁護士」という一語でも彼を表わすことは出来ない。われわれは彼を「作家」とも「画家」とも呼び得るのである。そして実際、彼は弁護士になる前に、26歳の若さで戦場に消えるのである。

このような Jacob のアイデンティティの欠如は、ある意味で、彼の精神の「両性具有性」を示すものとなっている。というのも「両性具有的精神」とは「共鳴し、侵透する」(“resonant and porous”)<sup>15)</sup>ものだからである。Woolf の言う「両性具有的精神」が、Keats のいわゆる “negative capability” と同じものであり、“androgynous poet” はまさに “chamereon poet” のことであるとする Phyllis Rose の主張<sup>16)</sup>は卓見であり、特に今、Jacob のアイデンティティの欠如について考える際、“negative capability”, “chamereon poet” という Keats の言葉は、われわれにより具体的なイメージを与えてくれる。われわれが見る Jacob は、自己主張を決してせず、カメレオンの如く、作家、画家、弁護士にと捉えどころなく変貌する、そのような存在なのである。

Jacob にとって、男女の隔り、階級の壁は、全く無意味なものようである。人々が集う Durrunt 家の居間で、本や新聞を読む男達と針仕事をする女達が、交互に対を成す形で描写されるとき、われわれは、男女の役割分担によって男性世界と女性世界の境界が歴然と引かれているのを見る。

しかし、Jacob はこの境界を逸脱して、毛糸玉を巻く Mrs Durrunt の側で彼女の思い出話を傾聴し、“‘Shall I hold your wool?’” (p. 59) と尋ねさえする。或は衣装を縫う若い女性達の素人芝居に、頼まれ参加したりもする。このように、Jacob は、全く自然に女性の世界に入ってゆけるのである。階級間の壁についても事は変わらない。さてこそ、「オペラハウスの中で、彼がどの席に座ったのか、一階正面の特別席か、天井棧敷か、二階棧敷か、言い当てるのは難しい」(p. 68) のである。

テキストの中で何度も強調される Jacob の無意識は、ある意味で、箕曲牧子氏が主張するように、<sup>17)</sup> 父権社会の後継者としての彼の特権的な境遇に依拠していると言える。しかし、Jacob は自分の特権性に全く無頓着であるように見える。そして、その特権性の拠ってきたる父権社会の因習や制度の権化ともいべき古い世代の男性達に対して、むしろ強い反発を感じている。Cambridge の教授 Mr Plumer の昼食会に招かれた帰りに Jacob が示す、Mr Plumer を含めた古い世代への反感は、非常に激しいものである。

‘Bloody beastly’, he said to Timmy Durrant, summing up his discomfort at the world shown him at lunch-time, a world capable of existing — there was no doubt about that — but so unnecessary, such a thing to believe in — Shaw and Wells and the serious sixpenny weeklies! What were they after, scrubbing and demolishing, these elderly people? Had they never read Homer, Shakespeare, the Elizabethans? He saw it clearly outlined against the feelings he drew from youth and natural inclination. The poor devils had rigged up this meagre object. (p. 33)

Jacob が自分の地盤ともいべき父権社会に反発するのは、父権社会の構造の特質が、秩序化、類型化にあるからに他ならない。Mr Plumer ら老人達の世界は「あるがままのわれわれの上に、まっ黒な輪郭を投げかける」からである。(“it must come as a shock about the age of twenty — the world of the elderly — thrown up in such black outline upon what we

are” — p. 33) Jacob の「若さと性向」が志向するのは、Wells や Shaw, そして安っぽい週刊紙が象徴する老人達の世界の対極にある世界、すなわち、Homer を生み Shakespeare やエリザベス朝の詩人達に多大な影響を与えた古代ギリシアの世界である。<sup>18)</sup> 古代ギリシアとその芸術は、Jacob にとって常に崇敬の的であり、彼はその憧れの国へとついには自ら赴くことになる。荒涼たるギリシアの土地を背景に、narrator は次のように言う。「われわれの中には、限定を軽蔑する絶対的ななものがある。社会の中でなぶられ歪められるのはこれなのだ。」(“There is something absolute in us which despises qualification. It is this which is teased and twisted in society.” — p. 140) Jacob を駆りたてて父権社会に反発せしめ、ギリシアに赴かせたものは、まさに、この「絶対的ななものか」の力であったに違いない。Jacob はギリシアから Bonamy に宛てた手紙の中で、ギリシアに来ることは「文明から身を守る唯一の機会だと思う」(“the only chance I can see of protecting oneself from civilization.” — p. 142) と述懐するのである。その Jacob を、イギリスの父権社会のしがらみを背負ってギリシアにやってきた Evan Williams が、将来「政界で成功しそうな男」(“a fellow who might do very well in politics” — p. 142) と評するのは、アイロニカルである。

だが、Evan Williams の目が全くの節穴だった訳ではない。新聞をくしゃくしゃに丸めて “But the *Daily Mail* isn't to be trusted.” (p. 135) と憂鬱に呟く Jacob の姿は、彼が、父権社会への反発、文明不信を心に抱きながらも「まわりを覆う暗い水に身を委ね」つつあることを暗示している。(“This gloom, this surrender to the dark waters which lap us about, is a modern invention.” — p. 134) 「彼は一人前の男になり、ものごとくに巻き込まれようとしていた。」(“he had grown to be a man, and was about to be immersed in things.” — p. 135) アクロポリスの上で、“Greece was over” (p. 146) と悟った時、Jacob は自らの意に反して、厳然たる粹組を持つ男性世界への決定的な第一歩を踏み入れたのである。

しかし、「ギリシア的なイギリス人タイプ」(“the English type which is so Greek” — p. 138) である Sandra Wentworth Williams に恋をし、ギリシアの女神の石像に彼女の面影を見る Jacob は、Sandra の中に、なお、古代ギリシアの幻想を見、信じている。当の Sandra が「何のために？」(“What for?”) という問いを繰り返す、目覚めつつある現代女性であることに、Jacob は気づかない。Sandra とは対照的に、彼は「そのような問いを自らに発することは決してなかった」(“Jacob never asked himself any such questions” — p. 157) のだ。

He was young — a man. And then Sandra was right when she judged him to be credulous as yet. At forty it might be a different matter. Already he had marked the things he liked in Donne, and they were savage enough. However, you might place beside them passages of the purest poetry in Shakespeare. (pp. 157-8)

Jacob の精神の「両性具有性」が彼の若さと分かち難く結びついていることは、narrator が若さを讃え、未来を担う若者の一人と Jacob を呼んだことから明らかであろう。今、Jacob は、この若さ、すなわち「両性具有性」と「男性性」との狭間で揺れている。しかし、“passages of the purest poetry in Shakespeare” によって narrator が示唆するように、Jacob にふさわしいのは「両性具有性」である。それ故に Jacob は、男性の領域の中で若さと共に滅びる他はなかったのである。

これまで見てきたように、Jacob は友人や知人、彼の生活の一部である文学作品など、他との関係性の中で「両性具有的精神」の具現として位置づけられていた。彼のアイデンティティは最後まで与えられず、テクストの中心に欠損部を残す。こうしてみると、中心を欠いた作品世界は、自意識を欠いた Jacob の精神世界を表わすと共に、アイデンティティを欠いた Jacob の存在そのものを意味していると言うことができる。この本が、“Jacob's Room” と題されたゆえんもそこにある。この作品は、Jacob ではなく、「Jacob の部屋」を描いたものなのである。作品の中で Jacob の

在、不在にかかわらず幾度となく描き出された彼の部屋が、彼の死を告知する大砲の響きの余韻と共に最後の場面で描出されるとき、残された部屋が留める彼の気配と死という絶対的な彼の不在性との共存は、*Jacob's Room* の作品世界そのものを表徴すると共に、作品の描く「Jacobの部屋」がもはや実体を欠いた過去の幻想であることをも露呈している。

以上、Woolfの創作についての考えが*Jacob's Room*の構造と内容をいかに支配しているかを、彼女の考えを端的に示した*A Room of One's Own*との照応性によって明らかにした訳であるが、Woolfが日記の中に披歴した、作品を自我から隔てようという創作の実践面におけるもくろみは、果して成し遂げられているであろうか。narratorを通してoutsiderの立場から語ることで、確かに、Woolfは自意識を抑圧せずして客観化し、対象化することに成功している。また、中心を欠いた理想世界を語りの対象とすることで、語りの核心に自意識が及ぶことを免かれている。夫Leonard Woolfが“the people are ghosts”と評したように、作中人物の深み、存在感が犠牲となっているにせよ、それはWoolfにとっての大きな第一歩であったはずである。他人の批評を、殊に夫の意見を、大変気にしたWoolfが、Leonardのその批評をむしろ得意気に日記に書き記し、「全体的に満足している」(“I am on the whole pleased”)と述べている<sup>19)</sup>ことは、その証左である。いずれにせよ、Woolfの作家としての探求は、今、ここに始まったばかりなのである。

## 注

- 1) Leonard Woolf, ed., *A Writer's Diary: Being Extracts from the Diary of Virginia Woolf* (London: Hogarth Press, 1969), p. 23.
- 2) Virginia Woolf, “Modern Novels,” *The Essays of Virginia Woolf*, Vol. III: 1919 to 1924, ed. Andrew McNeillie (London: Hogarth Press, 1988), p. 34.
- 3) Virginia Woolf, “Modern Fiction,” *The Common Reader: First Series* (London: Hogarth Press, 1968), p. 191.

- 4) Phyllis Rose, *Woman of Letters: A Life of Virginia Woolf* (Routledge & Kegan Paul, 1978), p. 188. 参照。
- 5) Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (London: Grafton Books, 1985), p. 98.
- 6) John Burt, "Irreconcilable Habits of Thought in *A Room of One's Own* and *To the Lighthouse*," *Virginia Woolf*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1986), pp. 192-7. 参照。
- 7) *A Room of One's Own*, p. 108.
- 8) *Ibid.*, p. 103.
- 9) Makiko Minow-Pinkney, *Virginia Woolf & the Problem of the Subject: Feminine Writing in the Major Novels* (Harvester Press, 1987), pp. 24-53, Rachel Bowlby, *Virginia Woolf: Feminist Destinations* (Basil Blackwell, 1988), pp. 99-116, Phyllis Rose, *op. cit.*, pp. 105-8. 等参照。
- 10) *A Room of One's Own*, p. 16. イギリスの婦人参政権運動のひとつのきっかけが第一次世界大戦であったことを, Woolf は念頭に置いていたのだろう。
- 11) *Ibid.*, p. 13.
- 12) Virginia Woolf, *Jacob's Room* (Triad/Panther Books, 1981), p. 102. 以下, 本文からの引用はこの版により, 頁数のみを引用末尾に記す。訳は, 出淵敬子訳『ジェイコブの部屋』(みすず書房)を参考にさせていただいた。
- 13) このような文脈においてみると, Miss Marchimont についての次の文章は興味深い。"And she could not ask you back to her room, for it was 'not very clean, I'm afraid',..." (p. 102) 彼女は、「自分自身の部屋」を本当の意味では持っていないのである。
- 14) 作品の中で名前を与えられた Cambridge の若者は Jacob を含めて 6 人である—Jacob Flanders, Timmy Durrunt, Richard Bonamy, そして Mesham, Anderson, Simeon。
- 15) *A Room of One's Own*, p. 94.
- 16) Phyllis Rose, *op. cit.*, p. 189. 参照。
- 17) 箕曲牧子「薔薇か, それとも雄羊の頭蓋骨か—V. ウルフ, 『ジェイコブの部屋』試論」『英米文学論集』(南雲堂)所収, p. 155. 参照。
- 18) Makiko Minow-Pinkney は, Woolf が評論 "On Not Knowing Greek" の中で, ギリシア文学を, 自意識から解放された非個人的文学と見做していることを述べて, ギリシア芸術と Jacob との類縁性を指摘している。cf. Makiko Minow Pinkney, *op. cit.*, pp. 32-5.
- 19) *A Writer's Diary*, p. 47.